

国際天文学連合 (IAU) 第 XV 回総会報告

宮本正太郎*

イギリスのブライトンにおける前回の総会について、今年三年ぶりに IAU の総会がひらかれた。今年の総会は正常でない分裂総会ともいうべきもので、会の前半はオーストラリアのシドニーで、後半は特別総会としてポーランドのワルソーでひらかれた。特別総会はコペルニクスの生誕五百年を記念するものであった。このような次第で、シドニーでは IAU の事務的会合の他に主として電波天文学、太陽関係の分科会、シンポジウム、エキスカージョンが持たれた。またポーランドではコペルニクス記念特別総会に付随して科学史、天体力学、太陽系のシンポジウムが各地に分散して行なわれた。

シドニー総会は 1973 年 8 月 21 日から同 30 日まで、この間総会は二度ひらかれた。初 21 日の日は開会式、最終日の 30 日には各種の決議事項の議決、新役員の決定などが行なわれた。総会および各分科会はシドニー市の西南部にあるシドニー大学の Carslaw ビルと大ホールなどでひらかれた。参加者数は同伴者をふくめて 730 名、ヨーロッパやアメリカでひらかれる時に比べて 1/3 程度とすくなくなっているのは、シドニーまでの旅費の関係であろう。一番多いのはもちろん USA で 234 名、フランス、イギリスなどヨーロッパからの参加者は 40 名どまりであった。ソ連の会員はポーランドには大挙しておしかけてきたが、シドニーへは僅か 8 名の参加があっただけである。我国は藤田良雄先生外 28 名、電波、太陽の専門家が多く参加した。

シドニーで決った事務的な事柄を簡単に報告しよう。

(1) 各国分担金の基礎単位 (ユニット) はこれまで 900 金フランであったがこれを 25% あげる。これは会員の増加、インフレによるものである。(2) 今回新しい会員として各国からの申出から約 600 名が認められ、IAU の全会員は約 3100 名となった。我国の国内委員会より申出た 35 名は全員認められた。(3) 中国復帰は話が出なかったが、南朝鮮の加入は認められた。(4) これまで各専門別の commission の数は第 4 から第 48 までであったが、今回二つの新しいコミッションが新設された。それは第 49 惑星間プラズマとヘリオスフィア (委員長 E. N. Parker), 第 50 公害対策 (委員長 M. F. Walker) である。この他に各専門委員会より申出のあった技術的な申合せ、約束が多数あった。(5) 次の総会は 3 年先きフランスのグルノーブルで開く。(6) 役員人事については会

長が、ストレムグレンからゴールドベルグにかわり総書記はドヤーヘルからコントプロスに代った。また 6 人の副会長はボク、ボルトン、フェレンバハ、イワノフスカ、ラベル、ムステルである。日本人の役員を各コミッションの番号と共に記しておく。

- | | |
|------------------------------|----------------|
| 4. 予報; 進士 晃 | 25. 恒星測光偏光; |
| 7. 天体力学; 堀源一郎,
古在由秀 | 大沢清輝 |
| 8. 位置天文; 安田春雄 | 29. 恒星スペクトル; |
| 10. 太陽活動; 守山史生 | 藤田良雄 |
| 16. 惑星物理; 宮本正太郎 | 31. 時; 飯島重孝 |
| 19. 地球自転; 須川 力
(委員長), 弓 滋 | 35. 恒星内部構造; |
| 21. 夜光; 田鍋浩義 | 林忠四郎 |
| 22. 流星, 宇宙塵; 広瀬秀雄 | 35. 近接連星; 北村正利 |
| | 42. 宇宙論; 成相秀一 |

50 に近い各コミッションが一斉に研究会合をもったわけであるが、その他に招待講演として太陽のバースト (ワイルド), 星間分子 (タウンズ), 宇宙の初期段階 (シアマ) などがあった。また総会の前後、キャンベラ, パース, クイーンズランドで太陽、電波関係の各種シムポジウムが開かれた。またマウントストロムロはじめ各地の天文台見学のエキスカージョンもあった。

藤田先生と筆者は事務的会合を分担したが、このため他には月と惑星の研究会合に出るのが精一杯であった。この分野も事務的委員会が多く、月については D. メンゼルを委員長とする小委員会が月面の地区割制を定め (144 の Region と 2304 の Province) 各区では任意の地点をあらわすのに経緯度にそして A, B, C, ..., a, b, c, ... で測り、例えば或地区の小クレーターを (Cb) という座標であらわすこととなった。また前回ブライトンの会合で月の裏側のクレーターに名前をつけたが、その後亡くなった人達の名前を今回追加した。その中にはザンストラ, ミネルト両先生の名もふくまれている。火星の方も月になって地区割りをきめ座標の約束をつくった。火星では大クレーターに名前をつける作業の他に、火山あり地峡あり平原ありで、その名もつけなければならない。火星の衛星を発見したホルの名前はフォボス衛星の大クレーターにつけられた。赤道帯クリセ地区にある地溝に日本名もつかって「カセイ谷」とつけてもらった。クリセとは伝説にいう東洋の黄金を産する島の名で、これが日本というわけでもあるまいが、ここに日本名をつけてもらった。命名委員長ボクラーさんの好意である。

* 京都大学飛驒花山天文台
Sho-taro Miyamoto, Report of the XV-th IAU
General Assembly.